「中国」という異文化理解のために

――漢詩と日本の詩歌との往還を通して――

加藤國安
（漢文学研究室）

はじめに

筆者の住む愛媛県では、俳句の里として俳句の文化活動が盛んに行われている。その俳句も、今日では国際的な広がりを見せており、外国から見るとまさに日本理解の上で取り上げるべき一つの対象になってきている。これに対して、漢詩の方はどうだろうか。漢詩は古くから日本人に親しまれてきただけに、その異文化性を十分に客体化できずにきてしまったように思われる。そして、今や漢文の知的教養が後退している状況にあるわけだが、しかし過去の既成観念が薄れたことは、漢詩を新しく見直す好機だと捉える姿勢も大切だろう。

今の日本人は、漢詩を中国産の古い伝統詩歌だとして、あまり関心がないかもしれないが、その漢詩が私たちのごく身近な所で、ひそかに〝健在〟でいることを案外知らない。漢詩を読むと、いろいろ面白い表現や発想に出会い、思わず感心させられたりするが、同様のものが日本の俳句・短歌にも詠まれているのを発見すると、再度感心させられる。江戸の芭蕉や蕪村、また現代の歌人佐藤佐太郎[1]らの句歌は、はっきり漢詩を踏まえたものだから当然だが、そういう明確な自覚や方法をもたぬ場合でも、現代の日本の韻文には、漢詩と類似する詩情が描かれていることがしばしばである。現に、日本の俳壇・歌壇と中国の文壇との交流も行われている。ということは、私たちは俳句・短歌などを介して、まだしっかり漢詩に繋がっているということだ。自覚的な文学活動という所までいっている例は少ないにせよ、漢詩と日本詩歌は、絶えず新しい関係を構築、あるいは探求し続けているといえるだろう。

今日、日中間では、その文化や国民性・視点などをめぐって互いの相違にとかく目が向けられがちだ。日本人の中国理解が深まったことの現れでもあるが、その反面、中国とのギャップを強調する論調も増えてきている。しかも、情緒的な反感も少なくない。だが、互いの詩歌を取り上げて比較してみると、相互に共感できるものも少なくないのであり、そうした事例をよく検証しながら、もっと理解を深め合う作業が大切だと思う。

以下、例を上げて論じてみたい。

加藤國安

一　漢詩と日本人の詩歌

「春山」　　春山　晩唐・貫　休

重畳太古色　　重畳たり　太古の色
濛濛花雨時　　濛濛たり　花雨の時
好山行恐尽　　好山　行きて尽きんことを恐れ
流水語相随　　流水　語りて相随う
黒壌生紅朮　　黒壌　紅朮（こうじゅつ）を生じ
黄猿領白児　　黄猿　白児を領ず
因思石橋日　　因りて思う　石橋の日
曾与道人期　　曾て　道人と期せしを

まず作者の貫休（八三二―九一二）について、簡単に見ておくと、貫休は今の浙江省の出身で、七歳で出家した後、各地を遊行してまわり、やがて蜀に居を定めている。そこで、前蜀国の王建の礼遇を受け、禅月大師の称号を賜ったという人物である。唐代の有名な詩僧の一人に数えられている。

第一句「重畳たり　太古の色」

「重畳たり」というのは、この「春の山」が、幾重にも続いている様をいう。この漢語の重苦しさからはや読む意欲をなくしてしまう人もいようが、じつは、日本語でも「たた（畳）なづく」「たた（畳）なわる」というのである。意味も、まさに同様といってよい。

やまとは国のまほろばたたなづく青垣山こもれる倭し美し

（『古事記』中巻）

この有名な古歌を思い浮かべれば、「重畳たる山々」の様子はたやすく想像できよう。

次に、そうした山々が、「太古の色」をたたえているという。悠久の時を越えてたたずんでいる、山々。まるで「太古の色」に包まれているようだ。この「太古」という時間感覚は、常にとてつもなく遠い過去を意識しうる中国ならではのものだ。ふつう日本人だと、山に向かった時、「ああ、太古の時間が流れている…」とは、なかなか感じないだろう。しかし、現代日本の詩歌から類似表現を探してみると、こんなものがある。

「石」　草野心平

雨に濡れて
独り
石がいる
億年を蔵して
にぶいひかりの
もやの中に

これは何億年もの時間を宿した、石の存在を捉えた詩である。今は「雨に濡れている石」なのに、「億年」を蔵した石というと、どこか近代的な乾いた感覚を感じさせる。本詩の詩的感性が、きわめて理知的であるためかもしれない。だが、貫休の「太古の色」の方は、むしろ古代的な情趣を帯びている。

さて、貫休は次句をどう詠んでいるのだろうか。

第二句「濛濛たり　花雨の時」

濛々と「花雨」がけぶっている。この「花の雨」というのは、一般的には〈雨のように降る花〉を言う。花霞みのようなものが一面に立ち込めているということか、あるいは、花をともなった春雨が降っていて、それがけぶって見えたのかもしれない。いずれなのかよくは分からないが、ともかくもこの句はそうした春の気配の満ちる時に、という意である。

第三句「好山　行きて尽きんことを恐れ」

「好山」というのは、この春山の素晴らしさを、一言で要約した言い方だ。たたなづく山々が、太古の時間を蔵して「花雨」に包まれている、そんな趣きの深い山よ、という称賛の辞である。貫休は、そうした春の山々を愛でながら歩いているのだが、とても気分がよかったのだろう。そして、思うのだった。ああ、この楽しみがいつまでも終わらなければよいのにと。

第四句「流水　語りて相随う」

春の山歩きの楽しみはいろいろあるが、春の小川も、その一つ。清らかな流れとともに歩いていると、何となくせせらぎと語り合っているような気分になってくる。そうしているうちに、いつの間にか流れと連れ立っているような楽しさに満たされてもくる。そんな春の小川との楽しい語らいは、わが俳句にもこう詠まれている。

春水と行くを止むれば流れ去る　　山口誓子
うしろより見る春水の去りゆくを　　〃

小川と等速度で歩いてみたり、急に立ち止まってみたり、そうかと思えば、後ろざまに流れを見送ってみたりと、小川と無心になって戯れている。漢詩の作者の貫休は、いったいどんな語らいをしたのだろうか。具体的には記されていないが、あれこれと想像するのもまた面白い。

第五句「黒壌　紅朮を生じ」

さて、次なる春山の楽しみは、何か。黒い土の上に、「紅朮」が見えるとある。「赤と黒」という、よく映える色彩の妙。春のたくましい黒土から、何か赤い色のものが生まれているのが見える。春の山というのは、ほとんどがさ緑一色におおわれているから、その中の赤い色というのはとても目を引く。たとえば、

ほうほうと紅き色あり春の山　　星野立子

一面のさ緑に覆われた春山の中に見える赤い色。鮮やかな色彩をすくい取ったことばから、春の鼓動がそのまま伝わってくるようだ。

貫休詩の「紅朮」の「朮」とは、アザミのこと。つまり、赤い野アザミの意だ。アザミにもいろいろな種類があって、春からはや咲くものもある。山道を歩いていると、あのアザミの赤っぽい色合いというのは、鄙びた中にも自然の美を感じさせてくれる。日本人の好きな野の花だ。

うねび山岩根さかしみ休ふとてあざみの花の紫をめづ　　佐佐木信綱

畝火山の岩々がすぐれた風情なので、少し休んでそれを見ようと思ったら、目の前にアザミの花があって、ついその紫の美に見とれてしまったことよ、というのである。山中でのアザミとの出会い、これまた山歩きの楽しいものの一つである。貫休も、紅に燃ゆる野アザミに心を奪われたのだった。

第六句「黄猿　白児を領ず」

そんな野の花の面白さを満喫しているところへ、貫休がふと目にしたもの―。それは、黄色いサルがまだ白毛の子ザルを連れている姿だった。この子ザル、春に生まれたベビーのようだ。まだ産毛で覆われているひよわな子だから、親がなにかにと世話をやいたり、手を貸してやらなければならない。そんな光景を見て、貫休は、この子ザルがまるで自分のように思えてならなかったのだろう。

第七八句「因りて思う　石橋の日／曾て　道人と期せしを」

そこで、貫休が思ったこと―。それは何かというと、かつて「石橋」で「道人と約束したなあ」というのである。この「石橋」は、中国の実にいろいろな所にあるが、これまでの貫休研究によれば、浙江省の天台山にある石橋を指すとされる。天台山といえば、有名な修行の地である。そこで道人と何かの約束をしたということだが、前句の産毛の子ザルからの連想よりすれば、修行不足の自分を教導してほしいということを含意しよう。

作品の全体を振り返ってみると、冒頭よりずっと春山の楽しさを連ねてきたが、最後にきて、のんきに過ごしている自分への省察の目が向けられる。そして、修行を誓ったかつての日々を思い起こして、しばしの感慨にふけるという構成になっていることが分かる。すなわち、第五句から第六句への変化が、じつにあざやかなのだ。唐代有数の詩僧と称されている人物の詩なのに、のどかな春山を賛美してこのまま終わるのではと、いぶかしく思っていた矢先に、パッと流れが切り変わることによって突然目を覚まされ、世の中をフラフラしている自分の姿がこの子ザルに強く重ねられて感じられるのである。

一見むずかしそうな漢詩でも、そのうちの何句かは、我々日本人がごく身近に感ずる思いとつながっていることがよくある。俳句や短歌と通ずる詩情があるのである。

次に、こんな作品を見てみよう。

「宿新市徐公店」　新市の徐公店に宿る　宋・楊万里

籬落疎疎一径深　籬落　疎疎として　一径深し
樹頭新緑未成陰　樹頭の新緑　未だ陰を成さず
児童急走追黄蝶　児童　急ぎ走りて　黄蝶を追うも
飛入菜花無処尋　飛んで菜花に入り　尋ぬる処無し

この楊万里（一一二七―一二〇六）は、南宋を代表する詩人の一人である。今の江西省吉水県の出身で、貧困の家庭に生まれながら進士の試験に合格、以後、たびたび左遷されながらも、国子博士、常州知事、秘書監、江東転運副使などの要職を歴任している。楊万里の詩は、今日約四千二百首ほど伝わっており、宋代では陸游についで多作の人だった。その作風は多様で、政治詩、農民詩、また軽妙詩やユーモア詩などが特色となっている。

本詩の制作時期は、紹熙三（一一九二）年の春（楊万里、六六歳）と考えられている。彼はその時、江東転運副使の任にあった。詩題にいう「新市」は、中国の各地にあるので、残念ながらどこの「新市」なのか、まだ特定されてはいない。「徐公店」も旅館の名というほかは不明。楊万里が、新市の徐公店に宿泊した時の作という以外、今のところ詳しくは分からない。では、順に見ていこう。

第一句「籬落　疎疎として　一径深し」

「籬落」とは、竹で編んだ垣根のこと。「疎疎として」は、途切れ途切れに続いている様をいう。つまり、家々の竹垣がまばらに続いていて、それに沿って一本の道があって、それがどこまでも伸びているというような、そんな光景をいう。こういう家並みは、以前は日本でも至るところにあった。今でも、中国のちょっと田舎に行けば、いくらでも残っている。なつかしい農村風景の興趣を感じさせる眺めだ。

第二句「樹頭の新緑　未だ陰を成さず」

その道路に沿ってであろう、並木があったようだ。樹木の枝先を見ると、まだ若葉が出始めたばかりの新緑の季節である。春の活力が枝先からあふれ出ている、そんな眺めをいう。まだ若葉の時期だから、当然「木陰はまだできない」頃である。この時期というのは、日差しもまだ強くなく、外を歩くのにちょうどよい陽気が多い。

第三句「児童　急ぎ走りて　黄蝶を追うも」

そういう穏やかな春の日は、子供らも外へ遊びに出てくる。何をして遊ぶかというと、昔のことだから「黄蝶を追」いかけたりすることになる。しかし、これがなかなか巧みに逃げ回るので、子供の方はあちらこちらと振り回され、ついには「急ぎ走る」はめになる。楊万里の観察は、なかなかに細やかだ。

春は、こんな蝶の風景というのがまさにぴったりだ。日本にも、こんな句がある。

蝶ひらひら天下の春をほしいまゝ　　角田竹冷

ついでに、こんな短歌も上げておこう。

をとめ子が髪のかざりのつくり花見つつ逐ひゆく蝶もありけり　　落合直文

これは少女の髪飾りの造花を、蝶が本物の花と見まちがえ追いかけてゆくというもの。楊万里の第三句では、子供が蝶を追いかけるが、これとは逆の様子を描く。春の田園でわがもの顔に遊ぶ、蝶や子供。まるでメルヘンのような世界である。

第四句「飛んで菜花に入り　尋ぬる処無し」

さて、その黄色い蝶だが、やがて菜の花畑に迷い込んでしまう。こうなると、一面の黄色にまぎれてしまい、どこへ行ったのか、もうさっぱり分からなくなる。蝶の見事な戦法に、あっけにとられている子供の顔が、ほほえましく思い浮かんでくる。そして、また楊万里のしてやった

りといった悪戯っぽい目も…。

この楊万里の詩は、軽快な調子で春の農村のメルヘン風景を描いた絶句として、とても有名なものだが、菜の花と蝶の親密な関係なら、わが国でもさまざまな句歌がある。

菜の花の化したる蝶や法隆寺　松瀬青々

蝶ひらひらゆくへのどかに風わたる菜の花の一里春の日ぬるき　金子薫園

行き行けば菜の花ばたけ蝶蝶の数もまさりて飯坂とほし　若山牧水

こういう菜の花畑にたわむれる蝶の風景を想像しただけでも、楊万里ならずともなんとなく童心に帰った気分がしてくるではないか。この漢詩などは、今の日本人の心情とそのまま通うものがあることを実感させてくれる。

春の野に菜の花香りゆらゆらと心酔はせて童子に還る　外山勝志

二　日中の詩歌の個性

「旅舎遇雨」　旅舎　雨に遇う　晩唐・杜荀鶴

月華星彩坐来収　月華　星彩　坐来に収まり

岳色江声暗結愁　岳色　江声　暗に愁いを結ぶ

半夜燈前十年事　半夜　燈前　十年の事

一時和雨到心頭　一時に雨に和して　心頭に到る

では、次に杜荀鶴（八四六―九〇四）の詩を読んでみよう。彼は杜牧の庶子といわれている。よく旅をした人物で、この詩はその旅先の旅館で雨にあった時の感慨を詠んだものである。

第一句「月華　星彩　坐来に収まり」

月も星もみるみるうちに消えてしまったという意味である。その原因は、詩題からも察しがつくように、雨雲が出てきたためである。なにやら陰気な感じがしてくるが、いったいこれから何が起きるのやら…。

第二句「岳色　江声　暗に愁いを結ぶ」

すると、山のどんよりした色も、江のゴーゴー行く音も、急に寂しげなものに思えてきたというのだ。こうなると彼の胸には、愁いがむすぼれてしまうのだった。旅先でのふとした天候の変化やそばの川音などが、微妙に私たちの気分を変えてしまい、それがどんどん広がって哀愁にとらわれてしまうなどというのは、日常、わりに経験することだ。ちょうどこんな歌があるので、掲げておこう。

山中の一つはたご屋雨もりてねられぬ夜半のたに川の音　佐佐木信綱

ただ、漢詩の場合は四句とか八句とかの長さをもっているから、信綱の短歌のように「ねられぬ」では終わらない。ここから先が、じつは漢詩（杜荀鶴）の腕の見せ所になる。

第三句「半夜　燈前　十年の事」

深夜の旅館、部屋には灯火がポッとともり、外は雨。旅先のことゆえ、ほかには何もすることなく、身内も親しい友もだれもいない。こんな時は全くやるせないものだ。することがないと、気持ちはどんどん自分の来し方などに向いていってしまったりする。そして、明かりの揺らぎのように、この十年の記憶があれこれと立ち上がり、思い出されてくるという仕儀となる。なかなか情感豊かだが、日本人の歌にもこんな例がある。

青山の山ふところの旅籠屋の淡きともしびにまもられぬるも　前田夕暮

ともしびのあかき一つを中心にわく感情が濡れてうづまく　細井魚袋

ともしびも人の心もともに揺れるものであることから、このような日中の類型表現が生まれてくるのだろう。

その時、杜荀鶴は思った。「思えば、この十年いろいろなことがあったなあ」と。日本でも「十年、ひと昔」とよくいうが、十年というのは振り返るにはちょうど区切りのよい数字だ。

十年は過ぎてゐにけり思ひつつ心次第にたかぶりを帯ぶ　宮柊二

いまそかりし世を思へばはろけしや十年の月は夢の如しも　中沢庭柯

十年分の思いに耽っていると、宮柊二のように次第に心の高ぶりを感ずることもあろう。また庭柯のように、夢のごとき月日だったとつぶやくこともあろう。杜荀鶴もまたそれは同じだった。ただ漢詩は、それだけではおさまらない。

第四句「一時に雨に和して　心頭に到る」

その十年の追憶が、まるで雨音に調子を合わせるかのように、ポロンポロンとはじけ出してくるというのである。雨垂れは、止むことなく続く。彼の思いも、それとリズムを合わせて、絶えることなく綿々と湧いてくる…、そんな情景が浮かんでくる。なにせ十年分の追憶となると相当の量だが、雨の夜の旅館というのは、そういう追憶を綿々と続けさせるには絶好の環境である。追憶と雨の音楽とが入り交じる中、彼の内面の楽章は夜更けまで続いていったことだろう。

一首を読み終えてみると、漢詩の構成の見事さに舌を巻いてしまうが、ただいろいろ調べてみると、じつは第四句の発想に限定すればわが国にもないではない。

雨のおとしみじみと胸にひびくなり　ただひとりなるともし火のもと　浅野梨郷

これを読むと、個々の情感ならば日中双方でほぼ同様の表現があることが分かる。

ただ漢詩は一定の長さを有するので、構成の妙や展開の面白さを発揮しやすいという利点がある。この点が、決定的に日本の短形詩とは異なる。一方、日本の短形詩は、構成・展開の妙芸は構造的にむずかしい。だが、その短さを凝縮力を発揮するための天資としている。ために、すこぶるイメージ喚起力が高い。この点は、日本の短形詩に一日の長があ

る。すなわち、これはそれぞれの個性なのである。

三　日中の詩歌の長短所

次に、そうした両者の個性の相違がくっきり現れた例を見てみよう。

「第四橋」　　第四橋　南宋・蕭立之

自把孤樽擘蟹斟　自ら孤樽を把りて　蟹を擘いて斟む

荻花洲渚月平林　荻花　洲渚　月　平林

一江秋色無人管　一江の秋色　人の管する無し

柔艪風前語夜深　柔艪　風前　夜の深きに語る

詩の題は「第四橋」というのだが、橋そのものはどこにも出てこない。詩の趣旨は、あの「楓橋夜泊」と同じで、この第四橋に宿泊してということだろう。ただどこの橋なのかは、不明である。蘇州という説もあるようだ。

第一句「自ら孤樽を把りて　蟹を擘いて斟む」

「自ら孤樽を把る」というのだから、これは連れがおらず独酌するという意である。独酌のわびしさは無論あるが、そうすんなりとわびしさを詠んだ詩になるのか、どうか。このようにはっきり寂しい時は、逆にわびしさの中の充実した詩情をすくい取る方が面白いものなのだが、さて本詩の場合はどうだろうか。

「蟹を擘いて斟む」というのは、お酒のおつまみにカニを食べることをいう。カニは、中国では、秋になって湖や江で太ったものが採れるので知られる。ことに上海ガニという名で呼ばれるのが有名だ。芳醇な酒に、このカニの風味がまた何ともいえない。

第二句「荻花　洲渚　月　平林」

中洲や岸辺には、荻の花が咲いていた。舟からそんな秋の風情が眺められたのである。具体的には、どんな眺めだったのだろう。この句には何も述べてはいないが、日本人の感覚からすると気になる。

荻の葉に折々さはる夜舟かな　　鳴雪

もしかすると、この句のように作者の乗った舟に、荻が触れたりしていたかもしれない。さらに第四句まで目をやると、「風前」とあるから、風が吹いていることが分かる。とすると、この荻が秋風に静かにそよいでいる様も思い浮かんでくる。

今、こんな俳句がある。

一もとの荻にも秋の戦ぐ音　　召波

昔の人は、たった一本の荻にも秋風の音を豊かに感じとっていた。この漢詩では、ただ「荻花　洲渚」とのみ言うだけだが、右の俳句では荻の葉に触れる様、またそのそよぐ音というように、イメージがじつに鮮やかなのだ。

さて、「荻花　洲渚」はいわば近景だったが、作者の目はついで遠景に向けられる。遠くには、明るい月がなだらかな林の上にかかっていた。そんな秋の月光を沐浴して、作者は清らかな気分になっていく。

第三句「一江の秋色　人の管する無し」

この江の秋の景色は、誰のものでもない。すみからすみまで全部、心ゆくまで楽しんでよいものなのだというのである。皆と分かち合う喜びもよいが、また独り占めにひたる喜びというのも、よいものだといわんばかりに…。酔って陶然とした心地に映ったのは、視界のかぎりに広がった伸びやかな秋の世界だった。この江の秋の景色は、誰のものでもない。このおおらかな詩情は、漢詩らしい発想といえるものだが、じつは日本にも負けじとこんな句がある。

秋興を恣にす山一日　　月斗

この山の秋の風情を、一日ほしいままにする楽しさよという感慨だ。世界最小の詩だが、一日ずっと満喫し満ち足りた思いに浸っている様子が、じつに鮮明に浮かび上がってくる。日中の詩歌は、それぞれこんなにも個性的な特色をもっているのである。

第四句「柔艪　風前　夜の深きに語る」

やわらかな艪の音が、夜の江べに静かに響き渡っていく。舟のかすかな揺れ。秋の風音。そんな中、そっと独り言をいっているような声…。艪をこぐ音だ。あの独特のきしみあう音が、物語りするような声に聞こえたのだろう。こういうもの静かな状況での音となれば、心に染み入るような感じがしただろう。

はるかなる人語のあとの秋の風　　遷子

これは、遠くで人の語る声がし、そのあとから秋風がさっと吹いてきて、その声とともにはるかな彼方へと消えて行くことを詠んだものかと思う。本詩の第四句も、この俳句に似た興趣がある。艪の音のあとから、そのきしむ音を深夜の秋風がどこか遠くへ運んでいき、闇の中にかき消えていく。秋風の中、この舟は「一江の秋色」とともにどこへ行こうとしているのか…、詩を読んだ後も、そんな静かな余情をかきたてさせてくれる。

漢詩と日本の短形詩の共振する詩情や、またそれぞれの長所などを確認したりながら、日中の文学をともに鑑賞するというのは、今まであまり試みられなかった方法だと思う。だが、このように日本の詩歌にイメージの翼を広げて漢詩を読んでみると、漢詩に対する難しそうだという印象は、少し変わってくるのではないか。要は、お互いを理解しようとする気持ちが大切だ。

四　漢詩のイメージの豊かな探求を

今度は、日本の有名な現代短歌から先に挙げてみよう。

滝の水は空のくぼみにあらはれて空ひきおろしざまに落下す　　上田三四二

まるで空が落ちてきたかと思われんばかりの滝の猛烈な勢いを詠んだものである。「空ひきおろしざまに」という破天荒な表現に、一瞬度肝を抜かれてしまう。ただ、この発想は、李白の廬山の詩に共通する所がある。

「望廬山瀑布　二首」　廬山の瀑布を望む　李　白

其二

日照香炉生紫烟　日は香炉を照らして　紫烟を生ず
遥看瀑布挂長川　遥かに看る　瀑布の長川を挂けるを
飛流直下三千尺　飛流直下　三千尺
疑是銀河落九天　疑うらくは是れ　銀河の九天より落つるかと

廬山には滝がとても多いが、その中でも壮観なのが秀峰寺の西側の絶壁にある瀑布だ。李白は健脚家にしてかつ大の冒険家だった。自分でも、「一生、好んで名山に入りて遊ぶ」（「廬山謡」）と言ってるくらいである。この廬山には、李白は何度か来ているが、本詩はそのうちのいつ頃のものなのか。二六歳説、また五六歳説などがあって、よくは分からない。

第一句「日は香炉を照らして　紫烟を生ず」

太陽が、青みがかった香炉の峰を照らしていた。この峰は、形が香炉に似ているところから、こう命名されている。その峰の周囲には、いつものように雲や霞がただよっていただろう。おそらく峰々が、それらを吐き出しているみたいに見えるのではないか。またそのモヤや山気に日が照ると、紫色の煙のようにも見えるのだった。それをじっと眺めているうち、李白にはふとこれが何かの光景のように思えたのだ。すなわち、これはまるで香炉から紫色の煙がモクモクと出てくるみたいだわい、と思ったのである。香炉峰と香炉とを引っかけたわけだ。何やら、詩は、冒頭から神秘の山めいた雰囲気に包まれている。

第二句「遥かに看る　瀑布の長川を挂けるを」

はるか遠くに、長い滝が落ちているのが見えた。この句では、何といっても「瀑布が挂かっている」という捉え方が面白い。そう言われると、激しい瀑布が一瞬にして白布と入れ替わり、そこに垂れ幕か何かが挂かっているようなイメージを思い浮かべてしまう。たしかに激しい滝でも、遠くから見たら威圧的な躍動感が消えて、まるで白い帯か布でも見ているような優雅なものに感じられるはずだ。これが、言葉の魔法というものなのである。それにしても、あの勇壮な瀑布が、李白の手にかかったら何と一本の軽い垂れ幕にされてしまうとは、まさに神業である。

第三句「飛流直下　三千尺」

しかし、その白い垂れ幕、ただ者ではない。なんと三千尺の真下に向かって、真っ逆さまに落ちているのである。この一気呵成のすばらしさ、まるで息を呑むような筆勢ぶりである。なにせ瀑布をゆるやかな布のイメージで捉えた直後、一転してこの飛ぶようなスピードだから、目もくらみ魂も消えてしまいそうである。頭の中では、白い布の道がどこまでも続いているようだなあと感心していたら、急にそれが動きだし、あっと言う間に身が空中に浮いてしまい、後はただ奈落の底に落ちて行く、そんな感じがしてしまう。

第四句「疑うらくは是れ　銀河の九天より落つるかと」

天の高みから深い底へと落ちていく感じを、李白はどう描くのだろうか。この最後の表現が見ものだ。李白はこう捉えた。おお、天上の銀河

が空から落っこちてくるようだと。なにせ天上世界からやってきた李白だから、比喩もまた宇宙的スケールになるという次第。李白の頭の中では、瀑布が絢爛たる白銀の河となって天上を流れ、空のどこかのへりまでやってくると、三千尺の落差でどこかに向かい落ちていくというのである。秀峰の瀑布が天上の銀河と一体化したことで、ここに見たこともない神秘の幻想美が生まれ出た。神々の創造せられたもうこの天地よりももっと玄妙な芸術作品が、この世に飛び出したのである。李白のこのひらめき、このインスピレーションが、彼の天才たるゆえんといえる。

李白の宇宙的スケールの詩、ほんとうに度肝を抜かれる思いがする。これだけ壮大な想像力というのは、ちょっと日本では考えられないのではないか。しかし、よく探してみると、こんなものが見つかる。

大空を水上としてながれくる銀河の滝に星の飛ぶかと　窪田空穂
大空は一つの滝となりはてて横さまにしもとどろき落つる　〃

空穂のこの短歌は、李白のこの詩を踏まえたのかもしれない。ただこちらの方は、天の川が現実でその滝は虚構であるという、いわば両者の虚実の関係が入れ替わってはいるが…。この両者を、ただの影響関係のみで鑑賞するのは発展的でない。文学の発想など、誰がどう活用してもよいものだ。面白いものは、放っておいても自然に広がっていく。問題は、相互の比較を通して美的趣向の新たな本質にどう迫れるか、また単独で鑑賞していた時と比べてどんな広い視野が得られたか、である。このようなより積極的な鑑賞法を開発していくことで、漢詩はいくらでも新しい命をもつようになるのである。

漢詩は、古来、三種類の現実からの超越を大事にしてきている。「物からの超越」「地上世界からの超越」「自分の我からの超越」である。このような自由な空間では想像力が豊かに発揮される。そういう世界を描いたものであればこそ漢詩は、まさに深みのある芸術的境地を表現し得たのである。詩とはどんな形であれ、内的生命の表現である。愛とか、悲哀とか、歓喜とか、瞑想とか、孤独とか、それらの生命が一定のリズムや芸術形式、芸術の論理をもって表現されたものをいう。

詩を根底で支えるのがイメージだが、漢詩でも日本の詩歌でも、このイメージが作中に立ち現れてくるまでの仕組みは同じだ。人が外界と交感するとき、まず漠たるイメージを介して行われる。やがてそれは整理と編成を経て、個人、個人の脳裏に鮮やかな像を結ぶ。そして、その像は再びイメージとして公衆の前に開示されてくる。それが、美的法則をもって一般的な像として定着するか否か、それが問題である。大衆が熟知しているイメージは、新たな可能性を伝えてくれない。詩人とは、このイメージをもって思考し、またそれを表現する人種のことだが、ある詩がもし美しさや魅力を感じさせるとすれば、それはそのイメージの美しさなのであり、またそれを創造する人間の心の面白さであると言うことができる。漢詩はそのようなイメージを豊かにもっている作品なのであり、そこに焦点を当てた鑑賞が今後もっと開拓されなければならない。

おわりに

現代社会の中で、我々は日々神経をすり減らす生き方を余儀なくされている。しかし、酷薄無惨な時代であればあるほど、人々はいっそう澄んだものや清らかなものを与えてくれる言葉を欲する。悲嘆の底を洗った浄福感こそが、我々を励ます原動力なのだ。今、我々は新世紀を目前にして、豊かな人間関係を改めて再構築する必要がある。その上で一参考になるのが、中国古典文化が大切にしてきた温柔なる精神の意義であ

る。漢詩の作品群には、こうした人間の温かさがいっぱい詰まっている。それは一つの優れた文化であり、我々はそこから柔和な人間性を見いだすことができるのである。

ただし、これまで見てきたように、漢詩は単に表面的に温かいものというのではない。詩であるからには、当然ながらある種の感動をことばで表現しているのであり、しかもその表現は、特別なことばを通して、対象の表面を突き抜けてもっと奥の方の、いわば物の本質にまで至っているものなのだ。そこには新らしい現実が獲得されているのであり、それと我々の日々の安穏な常識というものとは、かなり異質なものである。我々の常識的行動は、社会の一員として周囲の人々と安心して人間関係を結んでいくためのものであり、そのためにも従来の慣例に安んずることが大切だ。しかし、芸術作品というものは、常識的視点の固定化が人々に閉塞感を与えてしまうことを何よりも恐れる。ゆえに漢詩の作者も、たえず新しい物の見方を欲するのである。

しかし、長い慣習となってしまった見方を、もう一度原点にかえって捉え直すというのは、相当に困難なことであり、はたして今までと異なる新しい見方があるのかどうか、そこには厳しい苦闘がつきものだ。それを通り抜けた者のみが、かつて誰も見たことのないような新しい風景を描写するとか、時には心の本質までさかのぼって捉えたものを描くとかできるのである。常識という安全弁でもって苛酷な現実から身を守っている我々は、そういう詩人の発見によって未知の世界の本質をかいま見せてもらうのである。漢詩を読むということは、またそうしたものの本質に至るプロセスの一つでもある。

ここに一首の短歌がある。

見慣れたる景色なれども感情の突起のごとし今日見る山は

大西民子

これは、どんなに見慣れた風景でも、そこに新しい目がなければものは見えてはこないことを教えてくれる。またこんな短歌もある。

この日ごろ桜ゆたかに咲きをりて風吹くときに幹あざやけし

鈴木幸輔

満開の桜にむかうとき、人はふつう幹に目を向けることはない。幹は見えていても、その目は花に奪われている。それが通例である。この歌は、その意味で人の意表を突いている。風が吹くと華やぎがあおられ、明るさが水のようにゆらぎ、そのとき不動の黒い幹は存在を鮮やかにする。作者は桜の花に美を見るよりは、その幹に意志的なものを見いだしている。それはそのまま、作者の内面の意志的なものの投影にほかならない。見ようとする目が心がなければ、ものの新しい姿は見えてこないのだ。

我々は現代の息苦しさを思うにつけ、温かく優しい叙情詩やものの本質に至る詩をもっと強く求め、それを響かせる努力をしていかなければならない。漢詩や日本の詩歌との往還を通して、「中国」にもっと親しみをもって接してもらえる一つの契機になればと思う。さらに、そこから自国の文化についても、新しい理解が生まれてくることを願う次第である。[2]

注

①拙稿「歌人・佐藤佐太郎の蘇軾賛歌」（『愛媛国文と教育』第三一号　九八）
同　「佐藤佐太郎の蘇軾の嶺海詩への欣慕」（『愛媛大学教育学部紀要』Ⅱ－三一巻　九八）
同　「蘇軾の嶺海期の悟達の詩学」（『東洋古典学研究』第六集　広島大学　九八）
を参照されたい。

②拙論の視点と関連する書に、拙著『漢詩　響きあうことば』（シード書房　九七）がある。

（一九九九年五月二十受理）